考へもの

お酒呑が餘所から自分の好物を貰ったから、一人で片付けて仕舞ふのも惜しいものと思って、友達をよびにやりました。其手紙が次の樣なのです。

十字横月　水邊有酉　二人上木
口近於天

どう云ふ意味でせう？？

忠義な犬の話

やまとの翁

動物の話の中でも、殊に犬の話……忠義な犬や賢い犬の話は隨分澤山ありますが、今翁がお咄せうといふ樣なのは、先づ少いでせう。

佛蘭西の田舍で、ある一人の商賣人、隣村まで貸金の催促に行からと思って、或日のこと、馬に打ち乘り、日頃の愛犬を連れて出かけた。やがて向うへ行って、首尾よく金を受取ったので、其金袋を大事にしっかりと、鞍の前の處へ結び附けて、氣もかる〳〵と再び家路をさして馬を歩ませた、犬も主人の心を知ってか、前に立って見たり、後へ廻はったり、跳ったりはねたり、或は吠へて見たりして、喜んで居る。

さて二三里も行ってから、先づ一休といふので主人は兎ある木蔭で、馬から下りて、止せば宜しのに、大事の金袋だからといふので、それを馬から下ろして自分の側へ置いて、而して煙草など喫んで方々を眺めて居る。馬は此間にと思って、其邊の草を無暗と食べて居る、犬は『あゝ勞れた』といふ風で、主人の側で前足を思ふ存分伸ばして、而して赤い舌を垂らして「ハッハッ」と息ついて居る。

『さー歸らう』といって、主人は再び馬に乘った、乘のたは宜いが、さて大事の金袋を忘れたまゝ行き出した、犬はさすがに氣が付いたので、すぐ其袋を引嚙へよーと思ったが、とても重くって、力が足りなかった。それで、いきなり馬に追っついて行って、吠へて見たり、うなって見たり、泣いて見たり、いやもーさまざまにして主人に思ひ附かせよーとして見たが、主人は一向に氣が附かない、で、犬もーもー是迄と思ってか、今度は猛然と馬の脚に嚙み附き始めた。

主人は金の事には、少しも氣が附かないで居ったからして、先き程からの犬の具合を見て、大變心配し出して、殊に依ったら、こいつ狂犬病にかゝつたのかも知れないと思ひ附いた、屹度夫に違ないと考へつめて、小川の所へ來てから、ひよいと振り向いて、犬が水を飲むか知らんと思って見たが、忠義な犬は、中々そこ所ではない、一心に主人の事を思って以前よりも一層烈しく、吠へたり嚙み付いたりする樣になつた。

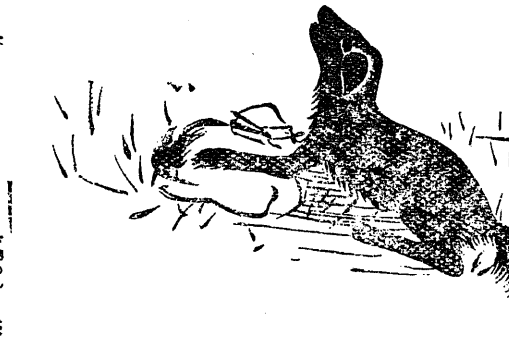
『こりや困った、屹度夫に違ない、可愛相に狂犬病なんだ、どーしたもんだらう。あー困ったなー、殺すより外仕樣がないか知らん、夫にしても誰か來て己の代りに此役をして呉れる人があってくれゝばいーに……イヤ〳〵こんなことをいって居たって仕方がない、早く遣って仕舞はんと、自分の生命が危い、つまり飼犬に手を嚙まれる譯だ』

か樣に言って手早くポッケットから、ピストルを取り出した、慄へる手にシッカと持て、あはれにも此忠僕に狙を向けた。ズドンと一發、切って放つと同時に顏を背向けた、狙は外れない、憐れな犬

は血に染れて倒れた、が健氣にも尙手傷に屈せないで、さん怨めし相に主人の方へ這ひ寄らうとして居る。何という酷い有樣だろー。

主人は此酷たらしい光景を見るに忍びないで、馬に一鞭あてゝ驅け出したけれどもー胸は悲みで一杯である、不憫な事だ、可愛相な事だといって犬の事許りを思って居る、そして金には氣が附ない、まー併し自分が犬に殺されたのよりは增しだ、などゝ思ってだんゝ乘り續けて居たが、暫らくすると、

『さー大變。已は余程馬鹿だ、犬も犬だが、すんでの事で大事の金をすつかり、失すのであった』といひながら、鞍の前を探して見た、が、袋は見えない。



是に至りて始めて彼は氣が附いた。『嗚呼馬鹿なことをした、罪は已に在りだ、犬のする事が讀めないで以て、已はあれを殺して仕舞ったんだ。氣狂所か已の失策を知らせよーとしてあんなに騷いだのだ可愛相に彼は死んでまで忠義を盡さうとしたのだ』

すぐに馬の頭を向け直して、飛ぶが如くに元の場所へ引っ返した。途中自分が犬を殺した場所まで來ると、其處には血が一面にたゞって草も地面も丸で眞紅になって居る。何んだか一種

云ふにいへぬ氣分がする、犬はと思って見たが、其邊には居らない。

とーぐ金を忘れた場所へ着いた。けれども其時の彼の感情は果してどんなであったろー、彼の心腸は此場の光景を一見した許りで殆んど寸斷した。不憫な犬は、もはや自分の敬愛せる併も殘酷極まる主人に伴ふことが出來ない所から、あはれや其最期の一瞬間を以ても尙自分の職務に服することを決心した、全身血まみれになった儘で、金袋の所まで這ひ戻って、來て、今や死の間際の苦しみに際して、金袋の番をして居ったのである。

夫でも主人の顏を見るとすぐ尙尾を搖かして、喜の心を見せて居る。けれども、もはや何にも出來ない、立ち上らうとしたが、叶はない辛うじて舌を出して、殘酷な所業の赦免を乞ふ積りで、悲しみに充ちてさし出した主人の手を舐りながら、温な顏をして主人を眺めたが、やがて眼を閉ぢて陷いって仕舞たといふ事である。

前號考へもの〻解

(一)私は夜戻るのが恐いから(虫の名二)蛭、蛙

(二)人力車夫とかけて、算盤と解く、心は掛けたり引いたり

(三)めくらの障子張とかけて、氷と解く、心は、寒で張る

(四)めくらの芝居見物とかけて、九月の花見と解く心はさく許り(菊許り)

愛讀諸姉の一人から左の懸賞考へものが出ました、お考へ付きになったら、遣って御覽なさい。